

この朝お読み頂いたイエスのたとえ話は、福音書に登場するたとえ話の中でも最も難解で、分かりにくいたとえの一つです。なぜ難しいのかというと、主イエスがこのたとえを通して不正な行為を奨めているかのように読めてしまうからです。物語の中で鍵となる言葉は9節の「不正にまみれた富」という言葉です。この言葉はどういう意味か、この言葉をどう解釈するかによって、この話が理解できるようになる。主イエスが語ろうとされたメッセージの意図が分かるようになり、その核心部分が掴めてきます。このたとえ話は不正な行為を例に挙げながらも、それ以上のよいもの、豊かなものを示しているのです。

たとえ話の流れを振り返ってみましょう。1節のbから2節です。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』」ここに登場する主人とは、不在地主のことです。管理人を雇ったのは、自分がその場所に張り付いて土地の運用・管理をすることをしないため、相当の権限を与えてその管理を彼に任せるためです。信用できる人物を探し、自分の名代として土地の運用を任せました。イエスの時代、金持ちとは大土地所有者のことを指しました。土地をたくさん持っていたため、誰かに貸してそこから収穫されたものの一部を一定割合で地代として受け取るというやり方で資産を増やしたのです。その土地をどのように使うか、小麦畑にするか、他の畑にするか、あるいは牧草地として羊飼いに貸すか、その判断は現地に住むこの管理人に任せました。土地をどのように貸すかの判断も含めて、主人は土地の運用を全面的にその管理人に任せただけです。

しかし、何ぶんにもそこに住んでいないので、自分の土地からどれだけ収益が上がっているかが分かりません。ゆえに、管理人として雇われた人は何よりも信義を守る誠実な人でなければなりません。偽りの報告をするような人間に管理人になってもらっては困る。現代の信託銀行もそうですが、依頼人から託された資産を細心の注意義務を果たしながら運用し、その資産を毀損しないように努めることがこの人の役割です。しかし、そうは言っても人間は弱い者ですから、大きな額の資産を運用する仕事を何年もやっていると、他人の財産がまるで自分の財産であるかのように勘違いをしてしまう。それは、イエスの時代も今も変わらない人間社会の現実であります。この男が主人の財産を無駄遣いしているという事実が、主人の耳に入りました。現代のわが国の刑法でいえば、業務上横領という行為に当たります。主人は彼を呼びつけて問いただします。「お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。」主人は、内部告発者の言葉を100%信用して、すぐにこの男を解雇しようとはしません。少なくとも管理人としての最低限の義務、最低限の職務を果たすように命じます。それが会計報告を提出することでした。彼に与えられた時間は、おそらく一日か二日だったと思われます。その首の皮一枚のところ、この管理人は、自分が蒔いた種とはいえ、困難な局面をどう乗り切るか、窮余の策を必死になって考えるのです。おそらく、頭をフル回転させてあれこれ考えたことでしょう。もし、私たちがこの管理人だったらどうか。現代の法治国家では、刑務所行きが免れません。しかし、イエスの時代のユダヤには体系立った刑罰の制度はありませんでした。おそらく、自由人としての身分をはく奪され、主人の奴隷となって日々肉体労働に駆り出される立場に追いやられることになったでしょう。それがいやならその地から逃亡して、最悪物乞いになることを覚悟する。しかし、彼はそのいずれの選択肢も受け入れることができませんでした。そこであれこれ思案した結果、肉体労働も物乞いもしなくてよい方法を考え出したのです。それが、4～7節に書かれています。「『そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』」そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、

『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バツ』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バツと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』』と言った。彼らは、主人の土地を借りてこれから収穫の時期を迎えようとしています。恐らく支払いの時期は、まだ来ていません。そのタイミングで、この管理人は初めの契約額よりも少ない額に証文を書き換えさせたのです。つまり、借金の減免、負債の減額をしてやったのです。バツとは、ヘブライ語のバテから来ています。それは娘という意味で、ひとりの女性が持ち運ぶことのできる水の量を指しました。それが約23リットルだったといえます。100バツはその100倍、つまり2300リットルです。これだけの量のオリーブ油を収穫するためにはオリーブの木が150本必要だったといえます。当時のユダヤで、100バツは約1000デナリでした。労働者の日当の1000倍にあたり、日本円で1デナリを仮に1万円とすると、1000デナリは1000万円になります。それを、半分の500万円に減額してやったわけです。二番目の債務者との契約額は、小麦100コロスだと言われます。こちらもうすごい量です。1コロスは230リットルです。100コロスはその100倍の

23,000 リットルです。100 コロスの収穫を得るには、100 エーカーの土地が必要だったそうです。その価格は、当時の金額で約 2500 デナリつまり日本円でいうと 2500 万円です。それを 80 コロスにした。80 コロスは 100 の 0.8 倍、2500 万円を 2000 万円に減額してやったのです。借金していた人たちと管理人の主人とは、互いに重要なビジネス・パートナーだったのでしょう。間違いなく、負債を減額された相手もお金持ちです。ただ、この管理人にはこの証文を書き換えるほどの大きな権限が与えられていました。そこで、主人のビジネス・パートナーである彼らを助けることで彼らに貸しを作り、後あと自分を雇ってもらおうと考えたのです。このような行為は、明らかに主人の財産を毀損する行為、背任行為でありました。このような負債の減免は、当時のパレスチナではしばしば実際に行われていました。たとえば、干ばつが来てその年の収穫が極端に少なかった場合、主人は「今年は収穫がなかったから、全部おまえのものにして構わない。支払いは来年で結構」と言って債務を帳消しにすることがありました。この管理人は、このような事例も参考にしながら負債の減額を思いつき、しかも証文の書き換えを、自分の手ではなく借主の手でやらせ、何かあった時の責任を相手にも負わせている。彼は相当に悪知恵が働く人であったことが分かります。

ところが、続く 8 節を読むと主人はこの管理人のやり方を褒めています。「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。」「この世の子ら」とは未信者のことで、「光の子ら」は信者のことです。主イエスを信じていないこの世の人の方が自分の時代の人々に対して賢くふるまっているとイエスは言われる。それは、彼らが今の時代がどのような時代かを見極め、賢く判断出来ているからです。この管理人も自分が置かれている状況と時をわきまえていました。解雇される決定的な時が迫りつつも、まだ僅かな時間が残されていることが分かっていた。その残された時間の中で考えられる最善の道、最も安全で最も無難な対処法は何かを懸命に考え、今回のことを行った。その動機もその方法も決して褒められたものではなく、不正なやり方であったことは否めません。しかし、主人、すなわちイエスが褒めておられるのは、その不正なやり方ではなく、彼の時代を見極める目と、自分に何ができるかを判断するその必死さ、抜け目のなさでありました。この言葉はこれを聞いていた弟子たちだけでなく、私たちにも向けられています。「あなたがたは賢くない。今の時代が見極められていない。判断できていない」主イエスはそう言われる。それは、キリスト者が今の時代や世界の問題に無関心だと言っているのではありません。私たちが今の時代を正しく、厳しく見つめていないということなのです。世の終わりが近づいている、神の裁きが迫っている、しかしキリストの死と復活によって救いは成就しキリストが再び来られる、ということを分かっているということなのです。

こうして 9 節の言葉が語られます。「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」ここで「不正にまみれた富」とはこの世のあらゆる富のことです。当時のユダヤのラビたちがこの言葉を使いました。この世のものは汚れていると見做すバイアスがかかった言葉です。それは包丁のことを「武器」または「凶器」と呼ぶのに似ています。包丁は調理に欠かせない道具ですが、それを使う者に罪の支配が及ぶと人を殺傷する道具になりうる。しかし、正しく使えばとても役に立つ。お金も同じです。その富を用いて神が喜ぶような人間関係を築きなさい、神奉仕をきなさい、とイエスは言われる。さらにその次の「お金がなくなった時」とはどういう意味か。それは、この世の富が過ぎ去る時、すなわち「死んだ時」のことです。その時に彼らが「永遠の住まい」つまり天国の御門で待っていてくれるというのです。私はこの 9 節の言葉を「地上のもの、世俗のものの象徴である富に支配され、お金を主人として生きるのではなく、その富を賢く使うことによって神に仕え、天国に宝を積みみなさい」とイエスが言われているのだと理解します。

最後の 10 節の言葉も良く知られた聖句です。「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」この言葉は、私たちが生きている一般社会では、小さな仕事を手抜きせずに丁寧にこなす人は、大きな仕事はなおさら丁寧にやり遂げられるはずだ、というほどの意味で使われます。しかし、聖書が言わんとするところはそうではありません。「小さな事」とは地上の富のことです。ルカの言い方では「不正にまみれた富」です。しかし、それは自分のものではなく主人から管理を委ねられたもの、神さまから運用を任されたものです。「忠実」とは、その地上の富を神さまが喜ばれるように用いることです。一方、「大きな事」とは「永遠に価値のあるもの」「神の国に入る特権を与えられ、永遠の命に与えること」です。地上の富、不正にまみれた富、しかし、使い方によっては役に立つ富を、正しく管理、運用することが出来る者は、御国に召されるその時に大きな宝を手に入れて、感謝と平安のうちに永遠の住まいに入ることができるとイエスは言われる。富を持っていることが、神さまに愛されている証拠ではありません。すべては神さまのものであり、私たちはその運用を任されている。富を神さまが喜ばれるように、神さまのために、そして神さまが愛されている隣人のために、賢く使うのです。そのような富との向き合い方を、イエスは本日のたとえ話で教えておられるのです。（祈り）